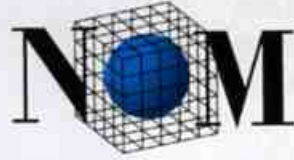


新潟県立近代美術館便り

# 雪 椿 通 信



第13号

1999.9

# 中国の正倉院 法門寺地下宮殿の秘宝 唐皇帝からの贈り物展

平成11年9月25日(土)～11月23日(火)

9:00～17:00

月曜休館 ただし、9月27日(月)、10月11日(月)、11月22日(月)は開館。10月12日は休館。

入館料：一 般 1,200円(900円)

大・高生 700円(600円)

中・小生 500円(400円)

( )内は団体料金。団体は20名以上

初めて確認された《秘色青磁》、日本に伝来した喫茶法を今に伝える唐代の茶道具、仏舎利が入っていた金銀の舍利容器、唐皇室の様子を偲ぼせる華やかな金銀器など、法門寺出土の文物70件を中心に唐文化の精華文物を加え、120件によって紹介します。

中国法門寺地下宮殿の秘宝が、世界に先駆け県立近代美術館で公開されます。この展覧会は新潟と西安の定期航空路開設一周年を記念して開かれるもので、文物全体の紹介が世界初ということだけでなく、展示品の質の高さにおいても注目すべき内容となっています。

さて、ここで法門寺の宝物発見の経緯や宝物の意味するところを、もう少し詳しく見ていきましょう。

1981年、中国陝西省西安市から120キロほどの郊外にある法門寺の塔が崩壊しました。台風による長雨が原因でした。陝西省人民政府は

1986年に塔の再建を決定し、調査隊を組織します。1987年2月、再建に伴う塔基部の発掘調査が開始されました。その結果、地下に唐時代の石室(地宮)のあることがわかったのです。その前室、中室、後室からは金銀器やガラス器、八重の金銀の箱に収められた仏骨、《秘色青磁》と呼ばれる磁器、宮廷茶器、絹織物など貴重な文物が大量に発見されたのでした。

法門寺は、後漢時代(2世



藍ガラス翻花植物文盤

口径20.2cm 高さ2.6cm 深さ2-1cm

イラン高麗のガラス製造の中心地で作られたものと考えられます。仏に経典を表すために要したものが求められました。



法門寺宝塔

(1988年再建) 高さは49m、八角形をした十三層の塔。

紀中期)に創建されたと伝えられており、唐王朝が成立したときから歴代の皇帝の厚い保護を受け、信仰のため、仏には豪華な品々が奉られてきました。顕慶5年(660年)に高宗と皇后は舍利を都長安と洛陽に迎え盛大な供養を行いました。その後地宮はほぼ30年に一度開けられ、法要の後多くの施捨品とともに寺に戻されたのです。舎利の周囲に置かれた大量の宝物は唐末期の873年、長安で行われた供養で皇帝懿宗以下が施捨したものです。しかし、9世紀に反乱が起こり(黄巢の乱)、10世紀初め唐王朝が滅亡すると宝物は石室に封印されたまま1987年に発見されるまで人々に知られることなく時の流れの中で永い眠りにつくことになったのです。



銀鍍金 摩竭文蓮形三足蓋付塩釜  
高さ27.9cm 外径16.1cm 足高16.8cm  
唐代には茶に塩を入れて飲むことが最も盛んになりました。これは塩を保持するための道具です。

宝物の中心には仏の真舍利とされる四つの指の骨が置かれていました。しかし、インドからきたという本物の仏舍利（真舍利）は一つだけで、残りの三つは真舍利を守るための影骨であることがわかりました。この地宮から発掘された宝物は装飾と彩色が施された石彫の四天王に護られていました。宝物は仏具のほかにも金銀器131点、絹、綾、更紗などの織物700点、宝石類400点、そして、大量の陶磁器が含まれていました。中でもその存在が確認できず、我が国でも『源氏物語』において中国製の青磁に対して「ひそく」という言葉が用いられるなど、幻想的なものとして扱われていた幻の器《秘色青磁》の実物が、初めて発見された意義は大きいと言えるでしょう。これは陶磁器考古学史上の空白を埋める大発見といえるものでした。さらに中国では消滅し、日本に渡って花開いた茶の心、優雅な唐時代の茶文化を伝える逸品が見付かっています。



銀鍍金 天馬流雲文茶碾  
座長27.5cm 身長25.5cm 座幅4.2cm 身幅2.8cm  
団餅茶（固形のお茶）を磨るための道具です。葉研と同じ構造です。

現代中国では見る事ができない茶道具ですが日本の茶道が見事にこの風雅な文化を受け継いでいます。中国のお茶の歴史と日本の茶道文化を比較しながら、お茶の世界をひも解いてみるのもいいのではないのでしょうか。また、ガラス器は、

シルクロードを通じて行われていた西域との交流を物語る証でもあります。そして、私たちは正倉院や遣唐使について改めて思いを巡らすことになります。

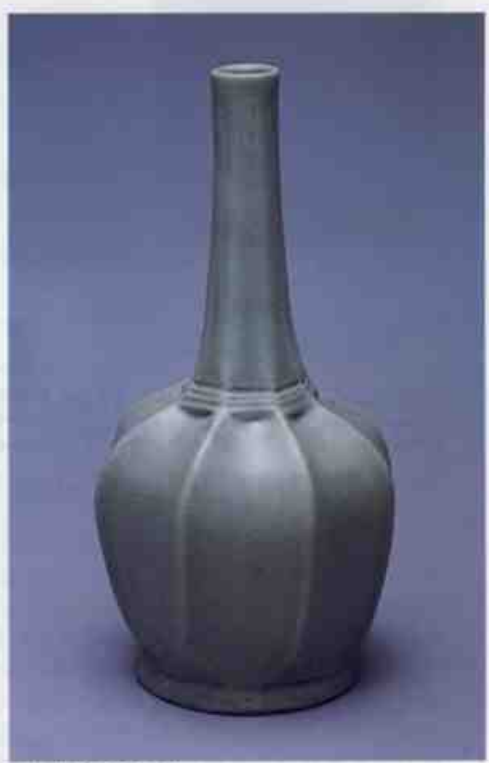
ところで、法門寺の地宮からは仏舍利や宝物とともに二枚の石碑が発見されています。

「真身誌文」と「衣物帳」です。「真身誌文」には873年の舍利供養がどのように行われたかということと、それ以前の法門寺の歴史について記されています。もう一つの碑文「衣物帳」には、そのときに埋蔵された奉納品について記されています。法門寺に舍利が返還されたとき、どんなものが納められたかということについての記録で、いわば宝物リストといったところです。これには品名、点数、重量などが示されていて用途や、品質などについても明らかにすることができたものでした。ここ

でも「衣物帳」が歴史の空白を埋めるのに大きな役割を果たすことになりました。

法門寺の地宮から千百年の時を経て再び姿を現した多くの宝物は、一部は法門寺に隣接した法門寺博物館に収蔵されています。ここには宝物を一目見ようと年間50万人を超える人々が訪れています。

（主任学芸員 中嶋 均）



青磁八稜形長頸瓶  
高さ21.5cm 口径2.8cm 底径8.06cm  
胎は比較的薄くつくり、キメが細かく色は澄んでいます。唐代、越窯の最高級の青磁を秘色磁と呼んで珍重しました。

～日本画の偉才～

# 横山 操 展

12月4日(土)～平成12年1月23日(日)

激しい炎と煙を吐き出す山。焼けただれ真っ黒になった塔。騒音が聞こえてくるような工事現場。ビルの谷間から青い空が覗くウォール街。一面の雪に浮かび上がる冬の木立。初期の横山操の作品は私たちが「日本画」と聞いて思い描く花鳥風月のイメージを大きく覆すものです。

横山操は1920年、新潟県吉田町に生まれました。1940年に川端龍子率いる青龍展に入選しましたが、間もなく召集を受けます。終戦とともに抑留され、画壇への復帰は実に十年後の1950年、第22回青龍展入選を待たなければなりません。戦後、現実の世界から遊離した日本画に対して厳しい批判がなされるなか、操は身近な、あるいは社会的なテーマを迫力のある大画面で

表現し、一躍画壇の寵児となりました。1960年代に入り、水墨画など日本の伝統的な技法や表現に学んだ風景画で新境地を開きます。

1971年病に倒れ右半身の自由を失い、左手で制作を続けましたが、2年後の1973年、53歳で没しました。画家として活躍したのはごく短い期間でしたが、その作品は今でもなお、強い力をもって私たちの心をひきつけます。

この展覧会は横山操の初期から晩年にいたる代表作約80点に加え、スケッチな



(夕景極地) 1970年



(塔) 1957年

どもあわせて紹介する大規模な回顧展です。1950年代の青龍社における華々しい活躍を示す大画面作品の数々から、60年代、いわゆる「赤富士」時代の風景画や水墨による表現、そして絶筆に至るまでを集めて展示します。没後四半世紀が経った今、改めて操の仕事を見直すことで現代の日本画が抱えている様々な問題を考える契機とし、あわせて多くの方々はその偉業と魅力を知っていただく機会となることを願っています。

(美術学芸員 小西珠緒)



(ウォール街) 1962年

## 新潟の美術2000

# 鈴木 力・柴田長俊展 —再生する絵画— (仮称)

2000年3月1日(水)～20日(月) 休館日なし・新潟県民会館ギャラリー

西暦2000年。何か新しいことが生まれそうな予感を秘めた記念すべき年の春。長い間、県民会館ギャラリーを会場にシリーズで県内在住作家の仕事ぶりを紹介してきた「新潟の美術」が装いを新たに再出発します。今回から、「県内在住」の枠を外し県外の本県出身作家も対象とします。また、テーマによっては、物故作家も取り上げる予定です。こうして担当する学芸員の幅広い企画により、魅力ある展覧会を実現したいと考えています。

さて、再出発の第1回展は、鈴木力、柴田長俊両氏による二人展です。鈴木力氏(一陽会会員・弥彦村出身・新潟市在住)、柴田長俊氏(創画会会員・上越市出身・軽井沢

町在住)は、おのおの洋画、日本画と属する分野は異なりますが、深い洞察力と豊かな想像力、構想力でスケールの大きな絵画世界を展開し、美術界の第一線で活躍されています。鈴木氏は本領の画面の構成力と独自のマチエールを発揮してイタリアの古都をモチーフに堅固な絵画空間の構築から「型」の創造をめざし、柴田氏は「人間の原点」「風土と人間」「生と死」をテーマに精神性と装飾性を均衡、併存させるべく新たな画境を進展させています。新装なった県民会館ギャラリーで新たな世紀への絵画の方向を予感させるお二人の力作をお楽しみ下さい。

(学芸係長 小見秀男)

# 群馬県立近代美術館コレクション展

平成12年2月19日(土)～3月26日(日)

群馬県立近代美術館は1974年に開館し、群馬県に関係の深い作家の作品や、国内外の近・現代美術の優れた作品を収集していることで知られています。収蔵作品は、洋画・日本画・彫刻・工芸・版画・書等にわたり、現在1,600点以上を数えています。



亀倉雄策(花と廃城)1966年

平成9年度より新潟県・群馬県・福島県との間における地域連携事業が検討され、当初より「文化・学習・教育」の交流としての事業が検討対象としてあげられてきました。



山口 眞(花子誕生)1951年

これにより群馬県立近代美術館と新潟県立近代美術館の両館における作品交換展がこの事業として実現することとなりました。

本展では群馬県立近代美術館のコレクションの中から選りすぐられた名品を展示します。具体的な展示作品としては、群馬県出身作家の湯

浅一郎、福沢一郎、山口薫などの作品を、又世界の美術としては、ルノワール、ピカソ、ローランサン、モネ、シャガールなどの作品を中心に、約70点により構成いたします。

群馬県立近代美術館では平成10年に既に「新潟県立近代美術館所蔵品展」を実施していますが、今回は両館で同時に所蔵作品を交換し、「コレクション展」として展覧会を行うものです。この展覧会を行うことにより群馬県と新潟県の文化を通しての交流が一層深まるものと考えています。是非この機会に群馬県立近代美術館の優れた所蔵作品の数々をご覧ください。

(主任学芸員 麻績勝広)



オーギュスト・ルノワール(読書するふたり)1877年

## 美術館友の会からのお知らせ

新潟県立近代美術館友の会は美術を愛する人の会です。鑑賞会や研修旅行、会報発行などの活動を通じて会員相互の親睦を深め、美術館の活動や運営に協力します。

常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引などの特典があります。

### ◎企画展開場式のご案内

一般公開に先立ち会員の皆様をご招待します。受付で会員証をご提示ください。

#### 横山 操展

12月3日(金)午後2時～

### ◎友の会作品鑑賞会

中国の正倉院  
法門寺地下宮殿の秘宝  
～唐皇帝からの贈り物～

9月27日(月)午後1時30分～

#### 横山 操展

12月10日(金)午後1時30分～

※各企画展の開場式、作品鑑賞会の日時および友の会事業の案内は、友の会だより等で随時お知らせします。

[お問い合わせ先:友の会事務局]

TEL.0258-28-4111

### 利用案内

■開館時間/午前9時～午後5時

■休館日/毎週月曜日

※ただし、9/27、10/11、11/22、1/10、3/20は開館、10/12、1/11、3/21は振替休館。  
および、12月27日(月)～1/3(月)、3/27(月)～3/31(金)の各期間休館。

■観覧料金

・企画展観覧料

企画展によって観覧料が異なります。

なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。

・常設展観覧料

一般……410円(330円)

中等教育(後期)・高校・専門学校・大学……200円(160円)

小学・中学・中等教育(前期)……100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮内町字原田278-14 940-2021

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

# 美術連話 (13) 「未見の師」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

昨秋私はふとした機縁から音楽論『西からの音』（彩流社刊）を出した。思い掛けなく多くの書評にも取り上げられ、各方面の方々に読んで頂けたことを嬉しく思っている。この題は、私にとって音楽は美術よりも早く私の許へ訪れて来た西洋からの使者であったという意味である。

家には父が集めていたレコードがかなりの数あって、中学へ進んだころ（昭和7年）からそれらのラベルを読むことを通じて音楽と外国語の知識が少しずつ貯って行った。ショパンの円舞曲第1番やチャイコフスキーの〈トロイカ〉などは最も早く覚えた名曲であった。

今なら自分で何らかの楽器を弾くところであろうが、私はレコード一辺倒で、中学を卒業する時分（昭和12年）には一角のレコードマニアになっていた。爾來六十年余りが経って現在に到っている。

この長い間に聴いたレコードやCDの中で私の音楽理解に大きな影響を及ぼし、今も忘れることのできない名盤が色々あるが、エドヴィン・フィッシャー（1886～1960）が1931（昭和6）年に録音したヘンデルの鍵盤楽器組曲第3番もまたその一枚である。〈序奏、アリアと変奏、ジーク〉の三曲を拵んで弾いたそのレコードを私が買ったのは昭和11年のことであった。

これはまた私が聴いた最初のパロック音楽でもあったのだが、当時はまだそのような言葉はなく、ヘンデルはバッハとどう違うかと言ったことが専ら論じられていた。

フィッシャーは同僚のアルトゥール・シュナーベル（1882～1951）の四歳後輩で、彼らに若いヴィルヘルム・ケンプ（1895～1991）を加えた三人がそのころのドイツを代表するピアニストであり、雁行する形でさまざまな録音が出たが、シュナーベルのベートーヴェン・ピアノ曲全集とフィッシャーのバッハの〈平均律クラヴィア曲集〉とは今に残る彼らの活動の記念碑である。若いケンプにはその後のLPの世界での仕事が残っていたが、シュナーベルとフィッシャーにはSPの録音しかない。

いまそれらのレコードを改めて聴いてみて思うのは、技術的に欠陥のあったシュナーベルの演奏は今日もはや通用しないのに対し、フィッシャーのレコードはいまだにみな生きているということである。上記のヘンデルの組曲もまた然りである。秀れた技巧に安住することなく一音一音実によく抑制がきいている。私はこのレコード

をどれほど愛聴したことであろうか。戦争が私からそれまでのすべてのコレクションを奪い去って五十数年、その間にもフィッシャーの奏でる舞曲は私の耳底で響き続けた。それは他の人の演奏では代替のきかないものであった。そしてこの程私は思い掛けなくもその復刻盤を知人から贈られて狂喜したのである。大きな期待と多少の危惧とをもってCDをかけてみた私は自分の耳に狂いはないことを確かめることができた。それは半世紀ぶりのフィッシャーの我が家への帰還であった。彼はヘンデルを弾いている。その音はヘンデルはこう弾くのだという自信に光り輝いている。私が〈西からの音〉と呼ぶ音はまさにこう言った音なのである。この一枚のレコードから私はピアノの演奏について、またパロック音楽とは何かに関して、限りなく多くのことを教わった。彼はこのヘンデルのあとでバッハの平均律四十八曲を録音したのみならず、ベートーヴェンのソナタ三曲（Opp.13,57,110）なども入れているが、バッハ、ヘンデル、ベートーヴェンらの楽風を見事に弾き分けて私に西洋音楽史理解の確かな緒を与えてくれたことを有り難いと思っている。ついに会うことなく終わったとは言え、フィッシャーは私にとり忘れることのできない師の一人なのである。



私はフィッシャーが弾いたバッハの〈平均律〉をLPとCDの二通り持っているが、戦前に日本でそのSPが発売されたかどうかを知らない。たとえSPが残されているとしてもそれを聴く機縁がもはやない。その代り今日の秀れた復刻技術はオリジナルのSPを上回るような美しい音のCDによる再生を可能にした。ヘンデルの音もまた素晴らしい。

## 表紙作品解説 小清水漸《Lapis Lazuli Garden》

緑青色のブロンズの舟、金箔が印象的な群青色の陶製の塊と、素材も形も異なりますが、芝生の上で絶妙な調和を見せています。舟の中の水もまた作品の重要な要素です。陽光を反射し、流れ

る雲を映し、時には風のそよぎに波立って、変化する自然と共に感じさせてくれます。題名のラピス・ラズリとは、古来顔料として大変珍重されてきた美しい瑠璃色の鉱物のことです。